



平成31年熊高45会同窓会にて

千原幸司君との積る話に・・・

八月夏のさ中に、千原幸司君が拙宅に姿を現してくれて、積る話に花が咲いた。在校中担任ではなかったが、ずいぶん付き合つた。当時、サイクリング同好会の顧問をしていて、夏休みの課外が終ると、毎年どこかへ自転車の旅に出かけていた。彼らの一年の夏も、同好の士が揃つて、一週間の北九州一周サイクリングの旅に出た。二年の夏は、南九州一周の旅。大事な高三の夏は、サイクリングどころではないだろうと思つていると、今年も行くと言う。長旅は無理なもので、天草一周ミニサイクリングでお茶を濁して、三年間の活動の仕上げとしたい。ただ、今になると、何処から天草に渡ったのかについて、二人とも曖昧である。

所で、同好会もサイクリングだけでは芸がないと、茅屋に集まって英語の勉強をするようになった。

George Orwell の Animal Farm なじを讀んだ。
あれから半世紀、一緒に読んでいた諸君は現下の情勢を見て、『動物農場』に描かれたナポレオンの姿をどう思い出しているだろうか。

彼らが卒業して一年後、結婚式を済ませ、
 馬に着くとき、思いがけず懐かしい顔ぶれ
 が揃っていて驚いた。見るに手にはトブレ
 ットペーパー。新婚の二人は、巾の廣いテ
 ープで見送られて、水前寺駅から新しい人
 生の首途に就いたのだった。そして今、歳
 月が流れて、あの見送りの中にいた千原君
 が、昨夏遠い所へ旅立った亡き妻のために
 今度は鰯香の煙で見送りに来てくれたのだ

(中本 潔先生)

これまでの歩み

私は昭和四十五年に卒業後、一年浪人して鹿児島
大学法文学部に進学しました。
昭和五十年四月に電電公社に入社し、ずっと事務職
で平成二十五年六月に〃〃を定年退職。その後は、
川崎市に居住しております。退職後は、若い時に夢
見た福祉の仕事に就きたいとの思いから、高齢者介
護施設（ヘルパー）を二年半経験しました。その後、
社会福祉士の国家資格を通信教育で取り、神奈川県
内の某市役所で生活保護面接相談員の仕事（非常勤
を二年三カ月経験しました。現在は無職ですが、最
後の仕事として成年後見人になりたいと、社会福祉
士の研修を受ける身です。高校時代は授業につい
て行くのに大変苦勞しましたが、自分が高齢者にな
ってやっとな勉強が面白くなりました。

老後には川柳・落語を

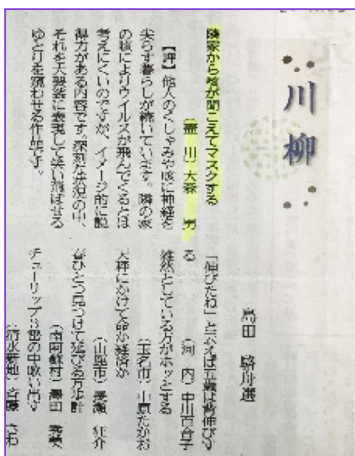
令和三年から熊日川柳欄に投句しています。一度だけ一等賞になった句です。この選者の方は褒め殺しが上手で、川柳の作り方も評を通じて教えてくださいます。

「隣家から咳が聞こえてマスクする」は年間最優秀句の佳作にもなり、その評の中に「まさかです」とあります。

「まさか」は落語にもたくさん登場します。「まさか」を通じて人間を描写しているのですよう。さか」の面白い落語は例えばこんな噺です。

「千両みかん」「粗忽長屋」「松山鏡」「厩火事」「靈算」「頭山」「高田馬場」などなど。

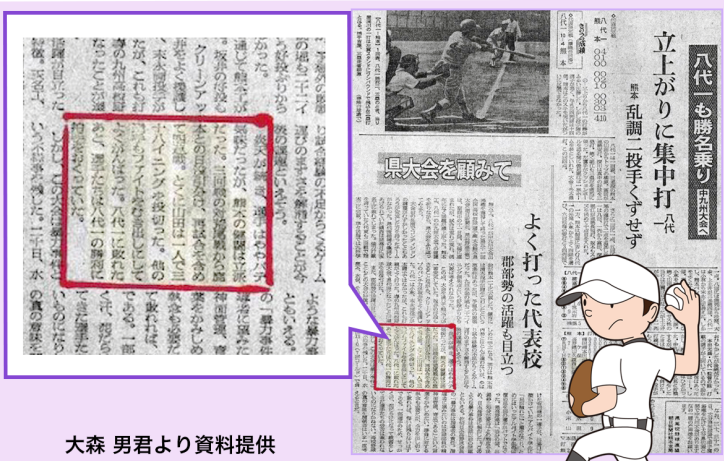
今はユーチューブで簡単に聞けます。誰のを聞いたたいいか迷ったら、古今亭志ん朝で探してください。



ところで、私の宝物は、令和三年に亡くなった新
作落語の旗手である三遊亭圓丈から頂いた、真打昇
進の時間係者に配る、挨拶状（かなり派手やかなも
のです）・扇子・手拭と彼からの手紙です。二十代
のころ数年彼（当時めう生）の新作落語を作る会（
めう生さんの発案でその会の名称は、日本ペンクラ
ブに對抗して、日本ボールペンクラブとし、活動中
実験落語の会と名付けました）に参加しておりまし
た。圓丈は桂文枝や春風亭昇太など新作落語を作る
囃家に多大の影響を与えたようです。



八代第一（今の秀岳館）との戦いは10対4で負けはしたものの、熊高の検討は立派であった。特に投手山田は一人で三十八ハニングを投げきった。打撃では松窪が三打数三安打二四球で、一人気を吐く活躍であった。（新聞記事が読めないのです、本村会長が代筆しました。）



大森 男君より資料提供

最後に自慢ついでに入選句
「体重計力を抜いて乗つてみる」
「ロボットの秋と言いつつよく食べる」
「福島にあつて東京電力か」
「災害やコロナ完封甲子園」
「高齢者見守る人も高齢者も」
「泣くもよしあくびまたきもみじの手」
「ぶん盗るを掌握したという輩」
皆さん川柳・落語を楽しんでみてはいかがでしよ
うか。

(二室 大森男)

卒後五十年（以上） 回想

高校を卒業して五十二年を経過した。私の辞書には古希という言葉なかったように思うが、ちゃんと時間は年齢を教えてくれた。髪は白くなり、そして薄くなり、顔にはシミやシワが目立ち、記憶力も定かでなくなり、ただ自我を主張することだけは前より強くなった。

七十年来生き続けていると、昔、「あんな年寄りにはなりたくないね」などと言っていた、その年寄りのものになっていく自分がいて、自嘲気味に「年寄りって何が悪い」と聞き直る。それを年寄りの手習いで習った「スマートフォン」のSNSに書き込むことが世間との繋がりになっている自分が、少し滑稽でもある。



そんな折、同級生の「マドンナ」M・Nちゃんといふエイスブックフレンドになって、一枚の五十年前の写真を送っていたんだ。凛々しい（？）青年か前にながら自分がある。後ろにいたのはH君。もう何年か前に鬼籍に入ったS君も若々しい。皆、前途洋々たる若者。この写真を撮った時の記憶はほとんどないが、昭和四十四年に少しだけタイムスリップし胸に熱いものがこみ上げる。時に同級生の訃報が入るようになったことはさみしい限り。

もう七十歳を超えたのだからなるべく皆と会おう
と思う。私の青春時代を知っているのは、同級生の
「あなた」しかないから。（八室 永田壮二）

先月熊大の教務がやっと空手部の練習許可を出してくれ二年ぶりの空手着、良いものです。医学部空手部をメインに指導して来て相当のレベルまでなっていたのですがコロナのお蔭でガタ落ちとなりましたやり直します。その意味でもコロナが妙にむかつかますし、EIRINワクチンの疑わしさも相まって、ワクチンなど打たずにコロナとやらとタイマン張ることになりました。しかし毎晩飲み歩いているが不思議なことに未だに目にかかったことがありません。また血圧も結構高いのですが、再測定の数値が今力で簡単に下がることから、死んだら〇からして「元気の証」として捉えももう少し薬で押さえるのは控えておこうと考えています。こんな表現をする和高本に絶対怒られると思いますが。頃合いをみて飲み始めるつもりですが、脳疾患で倒れたと耳にしたら笑って下さい。皆さん、もう少しです頑張りましたよ。

(十室 中川香史郎)